



# ひろひだより

No.8 2017.10.31

気もちのいい秋晴れの日に稲刈りが出来たと喜んでおられる間、この秋は雨が  
 多く農作業もままならぬ日が続いています。(世間では稲は2~3日お日様が  
 風が吹けば、わらわカラッと干して刈割ができるのですが、この分だと先は遅く  
 一年間食糧も大層なお米だけでなく、羊や馬たちの冬の食料もある大工たわらもうら  
 とカビてきて、猛さんも「長く自営してきたけどこんなことは初めて。うらめしいなあ」と空を見上げ  
 てはため息をついていられます。刈割ができると新米も食べられわけて...自然相手の  
 仕事はお天候やその御機嫌次第とはよく言われているが、「予定がたてられない」のは、保育  
 にとっては莫大のこのひとつです。

そもそも、ひろひの保育は「自由」に遊ぶ場面が多く、「予定を立てる」と思われるも  
 しくはせん。石原は2才児もいる火・木・金曜日は子どものやりたい遊びを中心に、その他で  
 こいつらと取り入れられ遊びが深まるかな、昨日の延長もやっていたり、と大人も考えながら、  
 子どものために大切に「～してははたらいて」で忙しい日常が展開されています。  
 その一日、木曜日のお天候は「料理」「田んぼ」「アート」「お出かけ」などのカリカ  
 ラムに、その時々の子どもたちの発達や興味、お天気や環境も考えながらはたはた  
 スタッフみんながていねいひび月単位で予定を考えています。その中には各種保護者会や  
 園説、森の開放日やくすみの日、見学の受け入れ、各小学校の行事等動かしていき  
 決まっている前提で保育の予定を組み立てていって、これはパズルのように「～して  
 ははたらいて」とかいくつから決められています。その中で、お天気次第でどう  
 にもならない、その時にどうしたいとそれができるかどうかわからないという「田んぼ」の事  
 は、最も流動的で最も予定のたてにくいカリキュラム。「わんちゃん、だいたい2日  
 しゃべりも聞いてあげますか?」「どうだろう。」「もうこの頃には刈割が終わって  
 「まだわかんない。」スタッフ会議で聞かれたも、どう答えられないのです。だから  
 お天気次第で、本当にまだわかんないのです。

今年度、私はひろひで保育に出る日数を減らし、農業や羊との農的自給的  
 暮らしの方に生活の軸を置いていきます。地域のお天候や土に...この寒冷地の  
 自給的自給を実践されている方々や作業する中でそこから多くを学ぶ。家畜との  
 暮らしのいろは、自然農法や有機的農業も学びつつ自分の田んぼのやり方を模索す  
 ...そんな日々を過ごしていきます。その中で最近強く感じていることは、自分がやりたい  
 は自然の全てを「受け入れる」暮らしなのかな、ということ。  
 周囲にはある程度農業も作物も人間が管理するやり方が主流で、家畜でさえその  
 生き物としての存在というよりは流通する「モノ」として管理されたり生まれ死んだりする。人間  
 がお金を生かせないならばその方が合理的だからです。でも中にはどうでもいいやり方を模索  
 される方もいて、幸運にもそういう方との出会いの中には学びがたくさんあります。

昨年死んでしまったオス羊を譲ってくれた御代田町の尾台さん。普天をされたから自給的  
 な生活の中で家畜と暮らしてきた方です。ひろひが一時御代田の森でも活動していた時、  
 近所に大きな白い馬がいました。人參を手でみると何回かおじゃまして、「この馬も  
 日本中色んな所へ放ってきたんだ。」というも笑顔で迎えてくれたのが尾台さんでした。  
 この馬が死んでしまった後、以前も飼っていた羊をまた飼いためたところからこのはだの  
 こと、和の飼育について思っていた羊を毛をとりユリテール種のオスがたてられないと言  
 うこと、「じゃあ  
 うでこの畜産されたオスを一頭譲るよ。」と無理なお願いを聞いてくれたのでした。尾台  
 の羊の飼育方法は独特で、「とにかく手をかかれない」というもの。広い敷地に放し飼いで  
 えさは真冬以外ほとんどやらす。水は飲めるようにしてあるだけで何しろ日よ暮ら  
 たいので羊たちは全く人に慣れておらず、和が近づいても柵の向こうの隅に隠れて  
 ほとんど顔を見ることができません。「除草と肥やしのために飼っているのだから手をかか  
 冬も雪の中で埋もれて死んでいくこともあるけど、これは仕方ないこと。潔いというかあ  
 というか。昨年秋、いたっていたオス羊の「夏」が突然死んでしまった。自然の  
 力で死んでいくことを受け入れるしかない。どうしようもないことはいくつもある。火  
 田も国産毛  
 生きものも、人間の力やどうしようもないことか多い。」と、夏と秋の間に、また産  
 られるからと

普段、保育の中で子どもたちはその気もちでいろいろな「受けとめ」で、その上で  
 どうしようか、と暮ら  
 して瞬時に大人は自分なりに関わりの方法をみつけないといけない。毎日毎日、お天候  
 の中で泣いてる子を受け取ることは、早朝の集まりに行くと「お天候」を  
 どのタイミングで少しづつ一本や手を離して椅子に座らせてあげると、一瞬で  
 泣いてる子の方をちらりとその子が見たら「お天候」を給本の方に気もちを向けて  
 瞬間？子どもの様子を見て観察してその子が自分の足で立てる瞬間を見逃さない  
 よう全神経を集中させる。お母さん  
 と高レベルで「受け入れ」ていく「受け入れ」ていくことが、それが  
 その子が自分で考え自分の力で立つ機会を奪ってしまう。これは「受け入れ」る  
 「受けとめ」るのか？その微妙な、そしてとても細かな違いは、保育の中で  
 ような気がします。

しかし、自然相手の仕事はたてて「受け入れ」るしかないことの方が多い。雨が  
 稲が草がたてても、野草が芽が腐ることもそれらどうあることもできません。  
 オスの  
 羊が来ようとして仔羊は生まれるのか？草で親子共々死ぬこともある。でもそれ  
 以外のところは...猛さんや尾台さんと一緒に日よ暮らして「お天候」  
 するのとは、自然の力を全て受け入れ淡々と暮らしていくという考え方に  
 1つとあることがよくあります。

「保育」という、色んなことを受けとめて、それからまた考えて予定もたてて日よ暮ら  
 みる中でつづいていく仕事と、とにかく全てを受け入れて一人黙々と土に向かう仕事。  
 そんな両方の日よ暮ら間がわたしの日々の日常です。  
 :美和子



## ああきいくみだより



10月最初のおあきいくみの日、くり初めて清里キャンプの話をしました。予想よりも長い時間、海賊船の前からくりたちの話し声が続いています。まつぼっくりのアートの片付けが始まっても、終わる気配がありません。大きく手を振って交替の合図を送ると、くりのみんなは慌わてて走って来ました。

その前のおあきいくみの日からキャンプの話に入っていたおあくり。こちらこの日、森の奥での話し合いからなかほか出て来る気配がありません。おあくりが飛び出して来たのは、くりのアートも半分近く終わった頃。果乃が「えーっ! もうくりさんアートやってんのー?!」と驚いたように、おあくりたちにとって長過ぎるとは感じない話し合いの時間だったのでしょ。

その日の全体での帰りの会。くり・おあくりそれぞれに「朝は何のお話しをしていたの?」と聞くと又方から、「ないしよー!」の大合唱。まつぼっくりたちは訳が分からずに不思議そうな顔をしていましたが、「ずるい。」と怒り出せる人はいません。その「ないしよー!」がみんなとても楽しそうに響きだしたからかもしれません。

それから、キャンプの日まで、くり・おあくりはそれぞれのグループでの「ないしよ、ないしよ」の話し合いを続けていきました。

ある日、キッチンでランチの準備をしていると、悦己が一人でそとやって来て。「あのね、ないしよの話、教えてあげる。きよ、さ、と キャンプ なんたはー。」と耳打ちしていきま。別の日の朝の会、後ろの列で大夢「清里キャンプだから...〇〇を持って行くよ。」羽路斗「うん! じゃあさ...。」とヒソヒソ話していると横にいたいろは「シーっ!! 前にまつぼっくりがいるんだよ!」と声は澄めているけれどピシャリと注意。慌わてて両手で口を押さえる大夢と羽路斗。でも、その目は嬉しくて仕方がないというように笑っているのがわかりま。くりたちにとって、自分たちだけが行く『清里キャンプ』は大切な大切な秘密。だから本気で注意もするし、怒られても当然のように自分の口を塞ぐ。それでも、嬉しさが込み上げて来る。

ある時には、礼がキッチンにやって来て「ねえ、みんなランチは『どこでもお弁当』じゃないの?」最近おあきいくみでは『どこでもお弁当』がみんなの人気。でも、ちよとランチは難しいかな...と、考えている間に、礼は近くの果乃に「そうだ! キャンプの時にやればいいんだ!」と小さめの声で話し掛け、果乃も「あ! そうだね。キャンプで出来るね。」とヒソヒソ。やりたいこととキャンプがずくに結びついていきま。おあくりは長い時間の話し合いを何度も重ねて、自分たちのキャンプのイメージがしっかりと出来上がっているようでした。だからこそ、思いついたことをキャンプでやってみたらどうだろうか、という発想も生まれてくるのでしょ。

おあくりは、キャンプが近づくにつれて、おあくり同士で固まって遊ぶ姿が良く見られるようになりま。

自分たちだけで秘密の話をしているという特別感、ワクワクする冒険をしているのと同じなのかもしれません。そして秘密を共有することによって仲間たちとの一体感をより強く感じ、関わりを深めることにつながるように思いま。

おあくりキャンプ当日の水曜日の朝の会。お互いのキャンプの秘密を明かし合いま。おあくりは「ここに泊まるんだよ!」「2回も!」くりは「清里 キャンプ なんた!」「小海 糸泉に乗るんだよ!」 これまで抱えていたワクワクと秘密を吐き出して、さらにキャンプへの期待が高まっているようでした。

帰りの会でまつぼっくりに月曜日までの長い休みを伝えると「やったー!」と喜んでる人がほとんど。でも帰る時に、意気揚々と大きなバックをびっぴハウスに運び込む おあくりたちを見て、「いいなあー、キャンプ...。」と羨しそうに見送っていました。

翌日、くりは追分駅に集まり、いよいよ清里キャンプへ出発。長い電車の旅もみんなでおごせま。あ、という間。自分の体より大きなリュックを背負っての道のりは、時々疲れて座り込んでしまうこともあったけれど、自然学校に着くとシャキシャキ歩いて玄関を送り、「こんにちわー! よろしくお願いま!」としっかり挨拶。その堂々たる姿に惚れ惚れしま。

それからの二日間は、帰りの電車を降りて、お母さんたちに向かて走り出す。その時まで、みんなと一緒にご一緒することが楽しくて楽しくてたまらない時間でした。

今年ばかりだけに、清里キャンプ。私自身も初めての清里キャンプでした。家族から一人離れてのお泊りで、泣いてしまう人もいるのか、不安を感じてしまう人もいるのかなと想像し、ある程度の覚悟を持ってこのキャンプに臨みま。しかし、涙に打てる人はほとんどいない。『みんなと一緒に』という力の強さ、キャンプをめぐり、ほい楽しもうという気持ちは、私の想像をはるかに超えま。4.5歳の子もたちが、1泊2日の初めてのキャンプをこんなに楽しく過ごせたことに本当に驚かされ、子どもたちがそれぞれに持っている力の強さを感じま。

お母さんに会った途端、お家の玄関に入った瞬間にこのキャンプの魔法は解けたかもしれません。でも、くりの人たち、そしておあくりの人たちもキャンプの中では一人一人が大人に頼ることなく、自分自身で楽しんでいたのでしょ。いいかと思いま。それは、それぞれのグループに合わせた話し合いを積み重ねていくことで、自分たちの決めたことが、キャンプの中で実現していく喜びから来るものでもあつたでしょ。周りを見ればそこに仲間がいるということも一人一人の支えになつたのでしょいいかと思いま。

なによりも、子どもたちもスタッフも、心から「楽しかったー!」と思えるそれぞれのキャンプでした。子どもたちと一緒にたくさんの「楽しかったー!」の経験を、これからいっぱい積み重ねていきたいと思いま。

(文中敬称略)

律子



田畑だより

この秋は、オスの羊を新たに迎え入れるため小屋作りをしていました。すでに出来上がっているメスの群れの中に若いオスを入れるときは、メスたちがオスをいじめることもあるので、始めは小屋を分け柵ごしに慣らしていき、慣れたら一緒にして交配するやり方がいいと聞いたからです。新しい小屋は始めはオスのための小屋に使い、慣れたら分娩用の産室にしてさらにそのあとはわらなどをしまっておくようにする予定です。ねずみが入らないようゆくゆくは床も貼れる作りで、産室にするので壁も温かくきっちり覆いしっかりした小屋を設計しました。建材や剛健な一枚板のドアを近隣の方に分けていただくうちに、なんだか私でも住めるような？立派な小屋が出来上がりました。ただ唯一の誤算は、作っている時からメスたちが興味津々で、工事中も集まってきては勝手に入ってくつろいでいたり気に入ってしまった様子だったこと。小屋が出来たとたん「入れて入れて」とめえめえ騒ぎ、試しに入れてみるとすっかり気に入って次の日からそこで寝ておりあつという間に「占拠」されてしまいました。予定がちよっと変わってしまったのですが、元の小さいぼろい小屋を補強してオス用と産室にリフォームして、新しい小屋はみんなが慣れてさらに産まれた仔もゆくゆく一緒にみんなで住ませる新居でいいか、と思いつつことにしました。そんなわけでメスとオスを最初に分けておく柵も簡易に作って、あとはオスを迎えるばかりとなりました。しばらくはよく見守らなくてはならないので脱穀が終わったら迎えに行こう、猛さんは「『婿入り』なんだから大安吉日を選んで迎えに行くんだよ。」なんておっしゃるのでそんな日を選んでいたらなんと台風がやってきて脱穀も「婿入り」も延期、さらには台風ではげかけが吹き飛ばされてはげを建て直しヘトヘト…今に至る…といった感じのこの月末です。全く予定通りにことが進まないことはまあある自然相手の仕事ではありますが、こんなに色々予定通りに進まないことも珍しい。

そんなわけで脱穀もまだできず、例年だと日程をお知らせしている収穫感謝の集いも、まだ予定がたたない状況です。どうかもうしばらくお待ちください。

### びっぴの森の木の実たち 10月 チョウセンゴミシ

軽井沢の森の木の実の中で一番好きにひかれてしまう木の実。それは「草膳餅五味子」(チョウセンゴミシ)です。始めてこの実をみつけた時、それぞれに感動して、とりとしいざらく手にとるのもたいていおいていたものでした。  
ぶどうのようにツルに木でいせの木にからまりながら全長5cmくらいの赤い房の実がぶらぶらと森の小径の縁に金魚たりについていたのです。この実をモチーフにしてブローチとか、誰かつくってくれたらいいから…と思ってしまう(ほどかわいい袋です)。そして、この実のさらに素敵なところは(土実の名前が「五味子」というだけあって、生で食べると「甘い・酸っぱい・しょっぱい・辛い・苦い」といっても複雑な味がする)が、果実酒にすると、とてもきれいなピンク色のお酒にできます。味もくせになるおいしさで、漢方にも使われるくらい薬効もあり、喉や、風邪によくききます。小さなお酒の器に入れて、食前酒などにするとお洒落です。  
チョウセンゴミシは標高1000m前後の場所によく生えているが、今年にこの軽井沢浅間山麓では10月その姿を目にします。木の縁、林道沿いでよく生えていて、採集もしやすいです。  
この秋はのんびり着たきもしてから、ゴミシを摘んでお酒やジュースにして、実りの秋、食谷の秋を楽しんでみてはいかがでしょうか？ : 菜花

